信州読書会　YouTubeLive&ツイキャス読書会

課題図書　トルストイ　『戦争と平和　第三部第三篇』

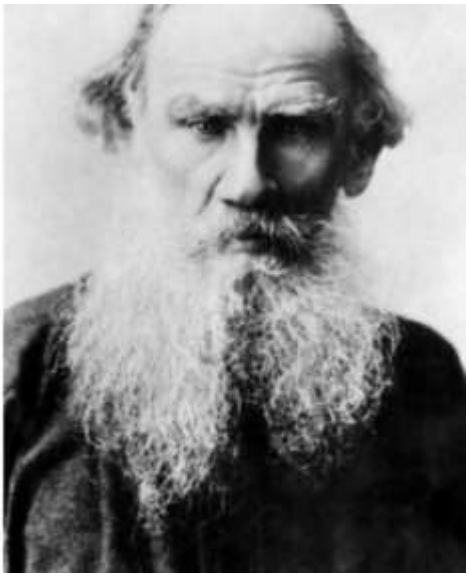
信州読書会では、毎週、YouTubeLive とツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
（募集要項はメルマガでお伝えします）
また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会　ツイキャス　[httP://twitcasting.tv/skyPebookclub](http://twitcasting.tv/skyPebookclub)
YouTubeLive　[httPs://www.youtube.com/channel/UCaJK5OLmeEYI97oBQigdcgw](https://www.youtube.com/channel/UCaJK5OLmeEYI97oBQigdcgw)
『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから　[httP://bookclub.tokyo/?Page_id=714](http://bookclub.tokyo/?Page_id=714)
今後のツイキャス読書会の予定です。 [httPs://note.com/sbookclub/n/ndcfa96fad284](https://note.com/sbookclub/n/ndcfa96fad284)
『ツイキャス読書会』 音声のバックナンバーです。
[httPs://www.youtube.com/Playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf](https://www.youtube.com/Playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf)
（各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。）

トルストイ

『戦争と平和』



第 348 回の YouTube 読書会の課題図書は、 トルストイ 『戦争と平和　第三部第三篇』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

作品の解説音声を公開しています。　[トルストイ『戦争と平和』解説]

メルマガ読者　TOTO さん

『戦争と平和』五巻　第三部　第三篇　トルストイ　感想文

今しなければならないこと、今自分が出来ることは何か。

戦争という最大の窮地に追い込まれた時、果たして自分は感情的にならずに、必要なことを瞬時に判断し行動できる人間でいられるのだろうかと考えさせられた。

ボロジノ戦の後、戦わずして軍がモスクワを退却するということは、ロシア人だったら父祖の中にも潜んでいた感覚をもとに予言できた、と書かれてあった。

「一番苦しい時にしなければならないことを発見する力が自分の中にあるのを感じながら、落ち着き払って運命を待ち受けていた」(岩波文庫五巻 P.43)。

いつ敵が侵攻して来るかわからない危機的状況下に、直感力と諦めと生き抜く意志の強さを潜在的に受け継いでいる気概に富む線の太い国民であるのを理解した。

四巻でアンドレイが、総司令官クトゥーゾフのことを、
「あの人は、何もかもじっくり聞き、何もかも記憶に刻み、何もかもふさわしい場所に置き、役に立つことは何ひとつ邪魔せず、害になることは何ひとつ許さないだろう。あの人は何か自分の意志より強くて、重大なものを理解している－それは必然的な事の成り行きだ」(P.368)と彼への思いを語っていた。

トルストイの「戦争は個人の意志を超える」という説にも通ずるものを感じた。

総司令官とは、大きな決断を迫られるのに、
「どんな瞬間にも、進行中の出来事の意味全体をよく考える事ができないような立場にいる」(P.28)という。
それなのに複雑で混乱の渦中にあり、「矛盾した無数の質問」に答えなければならないという立場。偶然が命令を無意味にすることもある。しかし時は待ってくれない。権力好きの人間でなければ務まらないのだと、クトゥーゾフという人間を想像してみた。

一方、「成就しようとしている出来事の意味を理解せず、だだ自分で何かをし、何か愛国的・英雄的なことをやり遂げようとする」(P.48)、思い込みの激しいモスクワ総司令官ラストプチンが対照的な人物として、かなり長く描かれていた。
自分だけのフィルターで見る愛国心、「モスクワが放棄される」という事実を民衆に早く伝えなかったラストプチンは、民衆の心を全く理解していなかった。

「ロシアの心を指導する人間という役割を自分の空想の中で自分のためにこしらえあげた」(P.177)。思い込みの為政者は、「自分で選び取った役割が急に無意味になった」ことで感情を抑えられなくなり、罪人への無意味な処刑へと走った。
勝手な布告で民衆に暴動を起こさせる、これこそ偽善者に見えた。
対照的な二人だった。

モスクワから離れるロストフ家の前に現れたボロジノ戦で負傷した多くの兵士達。
もしも一人でも残ったらと思うと手は出せないと考えてしまった。
しかしナターシャは、今自分が出来る一番大切なことを家族の中で一番先に気づいた。
大切な荷物は、置いていけばいい、そしてそんなナターシャに、ロストフ老伯爵も召使いもこれ以外にはありえないという気持ちに動かされていく。熱しやすいナターシャの気質が功を奏した。

大切な荷物を積んでいた私はハッとさせられた。心が浄化された。
ナターシャはこれでなきゃ！

やがて負傷したアンドレイと再会するのだが、その深い後悔と、「赦して！」という切ない言葉に、若いナターシャの過ちは許容範囲内だと思われてならなかった。

自分を捨てても、というピエールとナターシャはとても似ていた。

「天命」と思い込み、「ナポレオン抹殺」を決意するピエール。

「おれではなくて摂理の手がきさまを罰するのだ」と捨てゼリフまで決めていたのに、ナポレオンとの時間のずれに断念する弱気のピエールがとても人間らしかった。

戦争がどれほど恐ろしいものか、負傷したアンドレイ、気絶する程の痛みと、意識の朦朧とする中で見たナターシャ、二人の再会、残された数奇なシーンを早く読みたくなった。

（おわり）

メルマガ読者　おおい元気ぼっくすさん

戦争の裏にある「愛」の形

　ほぼほぼ戦争中心の章であったが、やはり特筆すべきは、意識朦朧とするアンドレイ公爵の登場から、ナターシャとの再会に至るまでのシーンだろう。それほど多くが語られているわけではないが、この中にある「愛」をキーワードとした言葉や心の動きは非常に興味深い。
　何となくではあるが、『戦争と平和』のサブタイトルとして「ある愛の形」というメッセージが隠されているような気がする。

　そもそもアンドレイ公爵はナポレオンを崇拝していた。偉くなってナポレオンのような存在になることを目標にしていた。
　それが、戦場での経験や混沌とした軍隊組織などを目の当たりにすることによって、人生観も大きく変化することになる。さらに瀕死の重傷を負うことで、より深く生と死を見つめることになる。そして愛のあり方を再発見する。包帯所で見た、憎むべきアナトーリの苦しむ姿。それがアンドレイ公爵に愛をイメージさせることになる。

　（引用はじめ）
隣人を愛し、敵を愛する。すべてを愛することは-----あらゆる姿であらわれる神を愛することだ。親しい人間を愛することは人間の愛でできるが、しかし敵を愛することは神の愛をもってしかできぬ。だからこそ、あの男を愛していることを感じたとき、おれは言い知れぬ喜びをおぼえたのだ。（新潮文庫 P.714）
　（引用おわり）
　このフレーズは実に印象深い。
　敵味方、憎しみを超越した神の愛。そこにこの作品のテーマがあると思う。

　またナターシャと再会したアンドレイ公爵。
　「おゆるしくださいませ！」というナターシャに対して、
　「あなたを愛しています」「何をゆるすのです？」（P.717）という言葉も感慨深い。まさに憎しみを超越した言葉ではないか。
　「名誉」を何より重んじていたアンドレイ公爵。ナターシャとの出会いから「愛」を知り、裏切られたのちの再会で「真実の愛」「神の愛」を語る。
　新潮文庫版ではここで第三巻がおわり、次から第四巻に移る。
　「愛」の形はどのように映し出されていくか。楽しみである。

　（おわり）

　おおい元気ぼっくすさんのご著書が発売中です！
『人生 100 年を楽しむために　ワクワクリベンジ読書のすすめ』

メルマガ読者　デュークさん

『戦争と平和』 第三部第二編　感想文

「戦争と平和」第三部第三編　感想文

モスクワを後にするロストフ家の荷造りの場面で、ソーニャは初めからコツコツやっていたのに、弟とふざけてばかりいたナターシャが途中から出張ってきて、詰めてしまったものをまた出させてやり直しを指示するところにむかつきました。より貴重なものだけを選んで詰める、そうじゃないものは置いていくと、確かに言ってることは正しいのですが、みんなが一生懸命荷造りしていた時に遊んでいて、詰めてしまった後で何を今更言っているのかと、それなら最初から言えと思いました。

こういう女は現代でもいて、往々にして男からは受けがいいです。後からグッドアイデアを出してみんなをあっと言わせるようなやり方をするのです。しかしこういう女をよく思う男はちょっと単純すぎると私は思っています。

あと、借金まみれの金のないロストフ家が物をたくさん持っているのが意外でした。良さそうな絨毯や食器などさっさと売れと思いました。

全てのロシア人が母だと感じるモスクワのことを占領したナポレオンが純潔を失った処女だと思うところが矛盾していて面白いと思いました。

クトゥーゾフの「なんでモスクワを明け渡すことになってしまったのか」という思いと、ナポレオンの「本当に俺はモスクワにいるのか」という思いが呼応していると思いました。

失った方も奪った方も同じように信じられないと思っているところが興味深かったです。

またこのことは、第三部第三編第一章に書かれている、歴史の法則研究の話とも関連していると思いました。

（引用はじめ）

「歴史の法則研究のためには、われわれは、観察の対照を一変し、皇帝や、大臣や、将軍を放擲して、大衆を指導している、同種の、無限に小さい要素を研究しなければならぬ。」

（引用おわり）

戦争のあるところに必ず皇帝や将軍がいますが、つまりクトゥーゾフやナポレオンは確かに戦争を指揮してはいますが、自身、なんでこうなった？と内心思っているように、本当の運動に関係してはいないような気がします。

本当に物事を動かしているのは大衆の中にある潜熱とかロシア魂であるとトルストイは繰り返し、色々な表現で言い表していると思いました。

（おわり）

メルマガ読者　さくらさん

『戦争と平和』 第五巻　P.284 までの感想文

今回こそは早く読んで、余裕をもって感想文を書こうと思っていたのに、またぎりぎりになってしまいました。
気になっていたナターシャとアンドレイが登場したところが特に印象に残りました。

（引用　はじめ）

アンドレイは気を楽にさせるように溜め息をつき、微笑し、手を差し伸べた。
「あなたですか？」彼は言った。「幸せだなあ！」
ナターシャは素早いけれども、用心深い動きで、ひざまついたまま彼のそばに寄り、そっとその手を取り、その上に顔をかがめ、かすかに唇を触れながら、その手にキスをしはじめた。
「赦してください！」彼女は顔を上げて、彼を見つめながら、ささやくように言った。（P.261）

（引用　おわり）

ナターシャはアンドレイの事はもう忘れたフリをしていたのに、再会できた事に辛いけど、嬉しかったと思う。
直接会って謝ることで、今まで心の中に溜まって消えない辛い気持ちが少しでも和らぐといいなと思うし、謝罪する機会があったというのが良かったなと思いました。
赦す気持ちはそんなに簡単ではないけど、私はアンドレイは心からナターシャの事を赦してあげたんじゃないかな？と思うし、そうあって欲しいと思いました。
それに生きるか死ぬかというような今の状況では、ナターシャのした事なんて取るに足りない事だと思う。そんな事より、いつ死ぬか分からないんだから小さな事にこだわり続けるのはもったいないし、前を向いて生きるのが大切だと思う。

この先のお話を全く読んでいないので分かりませんが、アンドレイはこの先長く生きられないかもしれないけど、最後の時を幸せな気持ちで迎えて欲しいなと思いました。
私はアンドレイは途中から嫌になったけど今はそう思います。

この長いお話もだんだんと終わりが近づいてきたので、これからも楽しみに読みたいと思います。

（おわり）

メルマガ読者　まこさん

『戦争と平和　第3部　第3編　1章から34章』

今回の範囲は感想をまとめるのがなかなか難しかったです。

戦争という圧倒的な事実が現実性をもって常に重くのしかかってくる一方、トルストイが「なるようにしかならない」と言っているように受け取れてしまって、そこにどうしても引っかかってしまいます。

そんななか印象に残った 2 つの場面を挙げます。

一つ目は 9 章のピエールの夢の場面、「いろんな思想をすべてつなげていく」という表現についてです。

理解してすぐ自分のものになるようなものではないが、これから長く自分の頭に残して折に触れて立ち止まって考えたいと思いました。

二つ目は 24 章、首都の平穏を守るためにあらゆる行動を正当化してしまうラストプチン伯爵が、実際は住民について何一つ理解しておらず、

自分の役割が無意味なものとなり、浮き上がった存在になったことを感じたことがヴェレシチャーギンの斬殺に結び付く場面はぞっとしましたが

同時に、いつでもどこでも起こりそうなことだと感じました。「あらゆる残虐なる恐怖政治も、もとはといえば、ひとえに住民の平穏への配慮からきている」という説明を聞けば、

今ロシアでプーチンが、安定を求め混乱を恐れる国民から支持を得ていることを連想せずにはいられません。

（おわり）

メルマガ読者　シュダイさん

戦争と平和　第三部第三編　読書感想文

（引用はじめ）
最寄り駅の改札抜ければ、いつもよりちょっと勇敢なお父さん　Hero
その背中に愛する人の wow wow 声がする
（引用おわり）

ファンキーモンキーベービーズの『ヒーロー』という曲の一節である。
家族を守るために働く父親とヒーローとを重ねる歌詞には妻子を持つ私も勇気をもらう。
きっとヒーローとは何かを守る存在なのであろう。

『戦争と平和』第五巻では我らが主人公ピエールもロシアを守るためナポレオンとの戦いを決意する。
そんなピエールは燃えさかるモスクワの街で逃げ遅れ建物に取り残された少女の存在を知る。
勇気を出して炎に飛び込み少女を救い出すピエール。
ナポレオンの暗殺は果たせなくとも少女を救った彼は間違いなくヒーローであろう。

一方、ピエールの宿敵ナポレオンも元々は対仏大同盟からフランスを守った革命の生んだヒーローであった。
彼は天才的な軍事術を見せフランスを窮地から救い、勝利に導く。
1804 年 12 月ナポレオンはフランス皇帝に即位するが、おそらくこれが彼の人生絶頂の時だったであろう。

ところで国王の上位存在である皇帝は複数国家の元首の意であることから本質的に侵略者としての性格を内包している。したがって 1804 年を境にナポレオンはヒーローから侵略者としての性格が色濃くなっていくのだ。
ベートーヴェンがナポレオンの皇帝即位に激怒して交響曲第 3 番『英雄』の表紙を破り捨てたのは有名な話である。これはきっと彼がナポレオンの中に侵略者の一面を見たからであろう。
そんな侵略者ナポレオンの勢いはロシアでの敗北にて減速する。
ナポレオンをフランス革命の普及者とみるならば、この敗戦は『革命』のいう一つイデオロギー輸出の停滞とも捉えることができるだろう。

さて、昨年からの『戦争と平和』の読書を通じて私が感じるのは現代の西側諸国の欺瞞である。
グローバリゼーション、新自由主義、NATO、それら進歩的な価値観を絶対善として疑わず普及させる現代の西側諸国の姿に当時のフランス帝国を見出してしまう。
一方でロシアの論理に従えば西側諸国のイデオロギーの脅威はナポレオンによる革命思想の脅威と変わらない。その意味でロシアがウクライナへの一方的な侵略者として果たして断罪することはできるのだろうか。
そう、ロシアの歴史観に立つならばウラジミール・プーチンとは西側諸国からのロシアの守護者であり、その意味においてはヒーローなのである。

（おわり）

メルマガ読者　ワカチコさん

『戦争と平和　第三部第三篇』 感想文

冒頭、アキレスと亀のパラドックスによる問いが提示されます。

複雑な一連の現象である歴史を語る時、人間ひとりひとりの気まぐれな欲動を認識して、それら全ての総和として全体を観ること。かくして本作の登場人物は 500 人を越えます。

トルストイが云うには、歴史の運動を人間の気ままな意志に微分して積分することで、歴史法則の把握が可能になるという答えに導かれます。ピエール、アンドレイ、ナターシャの心にも同じような問いがあり、また、クトゥーゾフがモスクワの放棄と撤退を命じるまでの心の動きや、ラストプチン・モスクワ総司令官が、民衆の怒りの矛先を支配者階級に向けないように世論を形成し、国家の福祉のために処刑する政治犯からの眼差しにも問いがあり、エレンに到っては宗教界への逆説的な批判として、法を破る離婚と再婚の難問を打ち出します。エレンは取り巻きから才にたけ頭がいいと思われていますが、ピエールはひどく頭の悪い女だと繰り返し、ののしっている点で、期待を裏切らない珍回答を思いつき、ピエールに手紙で離婚を伝えます。

1812 年 9 月 2 日モスクワ炎上の日、ロストフ家は領地から手配できた三十台もの荷馬車に、負傷兵たちを便乗させ避難します。二十キロ先で燃えさかる炎と負傷兵の呻き声が響く夜、百姓の家に泊まるナターシャは、ふとんがある母の寝床を断り、床の干し草の上で休みます。かつて母親のベッドにもぐりこみ、無垢で自由な心のまま、温もりと安心感に包まれていた少女が、苦しいけれどもアンドレイに赦しを乞う精神の鍛練を迎えます。またアンドレイも、生きている意識だけで幸せに感じる赤ん坊の頃を回想する場面があり、ふたりには、幼い頃のベッドの温もりに、善なる魂の原風景があります。

人は善として生まれながら、社会的に適応してゆく過程で善を失ってしまうと説く、ルソーの道徳哲学『エミール』と似ていて、ナターシャが上流社会特有の刻印を身に帯びていない、本来の自由な彼女で居られるのは、善なるものと一体である時なのだと私は思います。

（引用はじめ）

『何かと引き換えに、何かのために、あるいは、何かの理由があって愛する愛ではなくて、〈中略〉おれは魂のいちばんの本質で、対象を必要としない愛の感情を味わったのだ。』〈岩波文庫五巻 P.259〉

（引用おわり）

アンドレイが死の淵に横たわっている時、顔のそばで動く虫の微かな音が、アンドレイの体の中で刻まれるリズム音〈ピチピチピチ・チチ〉に変換されるオノマトペは、四巻 P.446 に出てくるナターシャの描写〈ぴちぴち〉と結びつき、有機的な生命力となって、奇妙でふわふわとした建物が、どんどんと伸びてゆきます。

スフィンクスが控える神殿に、架橋していく構造体として、理性の働きを彫刻的に描いており、魂のいちばんの本質とは『あらゆる形であらわれている神を愛する』ことだという。ひときわ神秘的で芸術的なシーンだと思います。〈P.257-259〉

15 世紀にアンドレイ・ルブリョフが描いた聖像画『至聖三者：しせいさんしゃ』が、2023 年にウクライナ侵攻の長期化する中、美術館からロシア正教の総本山に戻されました。

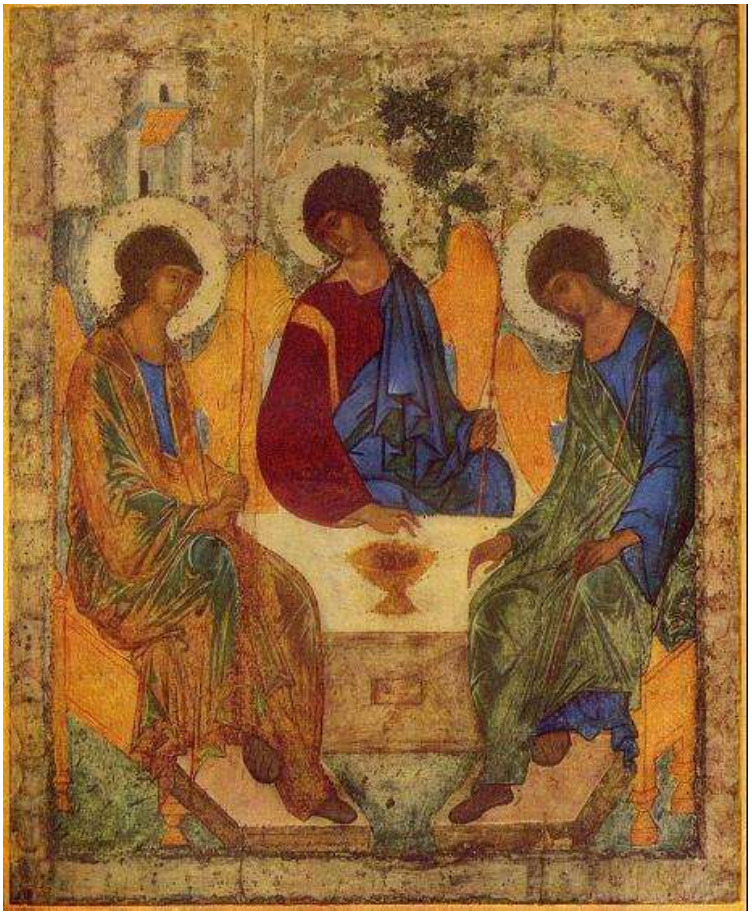
1812 年の祖国戦争の勝利記念と戦没者慰霊のために建てられた教会で、ロシア正教最高峰のイコンは、民衆に公開されました。三聖人の前には、アブラハムがもてなした油っこい食事の杯が置かれ、自己犠牲の試練で信仰心を試される子イサクの誕生を、聖人がアブラハムに予告する『創世記第 18 章』の場面が描かれています。

ピエールがボロジノからの帰路、三人の兵隊から油っこい食事の施しを受けます。〈P.69〉鍋のごった煮を平らげるピエールを兵隊は咎めるでもなく、『おまえ、どこさいくだ？』と心配し、街まで連れて行く流れが、創世記の逆転版パロディなのではないかと私は思いながら読み、その後、ピエールは『彼ら』のようになるのだと決心します。ナロード：民衆を助け、ナポレオンをやっつけるべく覚悟をした挙句、放火犯だと疑われてフランス兵に連行されます。

今この瞬間も続くウクライナ侵攻の歴史的背景には、祖国戦争の影も少なからずあり、『至聖三者』がロシア正教の心の拠り所として篤い信仰心で迎えられるロシアは、今も『戦争と平和』の壮大な物語の中にあるような錯覚を私は覚えます。

時代は前後しますが、ニコライ 2 世が野心的な領土拡大の計画に、日本も視野に入れていたことは、ニコライ 2 世を襲撃した 1891 年の大津事件において、津田三蔵の犯行動機に語られたことであり、ピエールの焦燥感を他人事ではないと捉えるならば、日露戦争に波及する一連の緊張関係を微分して積分せよと、トルストイは語っています。

（おわり）



アンドレイ・ルブリョフ 『『至聖三者』（しせいさんしゃ、ロシア語: ≪Ｔ ｐ ｏ и ц ａ≫）英語で言う、トリニティ trinity

メルマガ読者　玉井さん

マトヴェーヴナおばさんのクリームシチュー

というシチューを上野公園で炊き出ししているのでよかったら食べに来てください。

▼物語のハイライト（第 3 部第 3 編第 1 章～第 34 章）:
エレンがピエールと離婚して高級官僚的なおじさんと結婚した隙にフランス軍がモスクワまで攻めてきたけど市内は既にもぬけの殻になっておりアンドレイも死んだけどやっぱり生きていてナターシャと偶然再会した一方でモスクワに残ったピエールはナポレオン暗殺計画を企てるが放火魔として逮捕された……的な話。

▼読書感想文　～歴史の微分積分について～:
冒頭の第 3 編第 1 章において、またしても著者は従来の歴史家に反論した上で歴史学のあるべき姿を次の様に語る。

① 歴史とは、人々の全ての恣意の総和の連続運動であり、歴史学の目的は ≪この運動の法則を究めること≫ である。
② 上記①にも関わらず、従来の歴史家は任意の事件を取り上げて他から切り離して考察するだけでなく、一人の人間、皇帝、軍司令官の行動を、人々の恣意の総和の適用結果として考察しており、この二点が誤りである。
③ 上記①を解説すると、≪観察の対象に無限小の単位――歴史の微分、すなわち人々の同種の渇望を認め、積分(これらの無限小の数値の総和を得る)方法を発見してはじめて、我々は歴史の法則を究める希望を持つことができる≫ という。
④ 上記③の方法にのみ、歴史の法則を理解する可能性があり、ほとんどの歴史家は実践していない。

【微分積分を用いた歴史分析の原理】
以上のことから、著者の主張は上記①に集約されており、その実現手段を数学における微分と積分に見出している。微分とは、数学的にはある瞬間における変化の割合だが、もう少し概念的に捉えると、全体を細分化して分析する方法である。一方の積分についても面積を求める手段として用いられるが、著者の言葉を借りると ≪恣意の総和≫ と言い換えることができる。このように著者は歴史を連続運動と考えているため、ある非線形な関数(つまり複雑な現象)が在り、その時間間隔を限りなく 0 に収束させたときの変化率を「恣意」、その現象に至る時間間隔も同様に 0 へと収束させて、その瞬間的な変化量から全体の総和を求めると「歴史」になるという理屈である。

【持論に関する所感】
こうした著者の持論について、これぞ完全なる歴史学かと言われれば、机上の思考実験にとどまっておりこの段階では現実味を帯びていない。というのも、まず「恣意」とは定性的な要素であることから数値といった定量化は難しく、何かしらの強引な一般化を要するからであり、また、微積は 0 ではなく「0 への収束」である以上、連続運動ではない。とはいえこの手法が実現できれば現象における「確からしさ」は担保されるとは思う。もしかすると著者の意図はこうした実現手段を言いたいのではなく、歴史学が人間にとってどれほど困難な行為であるか、それを伝えたかったのかもしれないが、あ、そうそう、そういえば、さっき私はポンちゃんラーメンを食べた。それは本日 18:00 の事であった。遡ると私は 18:00 の 30 分前、つまり17:30にポンちゃんラーメンを無性に食べたくなった。そして家を飛び出した。急いでたから徒歩ではなく自転車でコンビニへ向かい、そしてポンラーを買って家に戻ると時刻は 17:55。で、食べた。ポンちゃんラーメンを。以上が私という線形な個人からなる、恣意の、総和の、観察結果である。

といったことを考えながら、ぼんやりしていると「あなたの住んでる東京にはポンちゃんラーメンは売ってません、なんでウソつくんですか」という声が聞こえてきた。

以上

（おわり）

信州読書会　主宰　宮澤さん

日本人の潜熱

（引用はじめ）

出て行こうとし、最初に出て行ったのは裕福で、教養のある者たちで、ウィーンやベルリンが無傷のままだったこと、そこではナポレオンの占領中に、市民たちが魅力的なフランス人といっしょに楽しく時を過ごしたことを知っていた。しかもそのフランス人たちが当時のロシアの人びと、とくに、ご婦人たちは大好きだったのである。

彼らが出て行ったのは、モスクワでフランス人に支配されるのがいいか悪いかなどという問題は、ロシア人にはあり得なかったからである。フランス人に支配されることはできなかった。ロシア人にはあり得なかったからである。(P.46)

（引用おわり）

昨日、ゴダールの最後の映像作品、『遺言／奇妙な戦争』という20分くらいの映画を観てきた。ロシア語を話す男の声が聞こえ、フランス人の女性の声で、「ロシア語はやめて、信用ならない言語よ」と答えるシーンがあった。

ロシア人とフランス人は、仲がいいのだか悪いのだかよくわからない。フランス人の極右、とりわけ国民戦線の党首ルペンなどはプーチンとわりかし仲が良い。新左翼的な理念を捨てなかったゴダールは、右翼が嫌いだろうし、ロシアも嫌いなのかもしれない。そして、フランス大統領マクロンは、キーウやオデッサにフランス軍を派遣すると息巻いている（2024.3 末時点）

我が日本のことを思えば、太平洋戦争の無条件降伏というのは、過酷であったと思わざるをえない。連合軍に無条件降伏することによって、日本人の精神というのはすっかりアメリカ人に支配されてしまったのではなかろうか。ロシア人にはありえないことが日本人に起こってしまったといえなくはないかだろうか。米軍基地が日本にあるというのが当たり前という感覚で戦後 80 年近く暮らしてきているということは、日本ではありえても、ロシアではありえないだろう。日米同盟が築いてきた平和が、日本の戦後の経済的繁栄をもたらした時代が、終りを迎えつつある。

日本がナポレオン戦争におけるロシアのように侵略戦争の被害国であるならば、焦土作戦もあり得ただろう。だが、第二次世界大戦では、日本は帝国主義的拡張政策のすえにアメリカと交戦状態になったのだから、モスクワのように東京を焦土作戦で放棄して、戦い抜くという選択肢は最初からなかった。

『戦争と平和』を読みながら、ロシア人と日本人の民族意識をついつい比較してしまう。

日本人にはまだ、潜熱（シャルール・ラタント）のようなものがあるのか？　ピエールが『彼ら(P.73)』と呼んだ人々がいるのだろうか？　そんな事つらつら考えてしまったが、益（やく）もないことかもしれない。

（おわり）